

〔学術論文〕

他者意識に対する非対面型コミュニケーションの影響

Effects of computer-mediated communications on consciousness of others

野中 壽子

Hisako Nonaka

要旨 本研究では、携帯メールやインターネットによる非対面型コミュニケーションへの意識や依存度が、他者への関心や他者に対する行動にどのように影響を与えるのかについて検討した。大学生739名を対象に、携帯メールやインターネット利用実態とそれらに対する意識、他者への関心や他者に対する行動について質問紙による意識調査を行ったところ、メール依存の場合は他者に対する関心も高く行動についても社会的に容認される行動をとる傾向がみられたのに対し、匿名性を志向している場合にはその傾向はみられなかった。

キーワード：他者意識 非対面型コミュニケーション 行動様式

1 はじめに

現代社会は、好きな時に地球規模の情報が得られるようになり、情報の取得に関していえば時間や物理的距離の問題が一挙に解決した。情報のやり取りについて世界はますます縮まりつつある一方で、すぐ近くの人とでも携帯メールでやり取りするような「対面しないコミュニケーション」の行動様式が特に若年層の間で定着しつつある。

実際に相手と対面してコミュニケーションを取る場合は、相手の表情や動作、声の調子等、微妙な非言語的手がかりとすることができ、それらを迅速に読み取り、社会にある文化規範や規制と照らし合わせて対応することが必要となってくる。携帯メールやインターネットによるコミュニケーションにおいては、非言語的手がかりは希薄、あるいは存在しないため、対面型コミュニケーションで培われるはずの他者の様子や行動の持つ意味を読み取って自分の行動様式に反映させていくという、社会的スキルの獲得にも影響を与えられられる。

本研究では、携帯メールやインターネットによる非対面型コミュニケーションが、他者への関心や他者に対する行動にどのように影響を与えるのかについて検討した。

2 方法

対象：東海地方の9大学の大学生739名（男性334名、女性405名：平均年齢 19.2 ± 1.1 歳）。対象者の所属学部は表1に示した。

表1 対象者の性別・所属学部別人数割合

	全体	男性	女性
医	1.3	2.2	0.6
薬	3.1	4.2	2.3
工	15.2	30.0	2.3
看護・医療	6.7	1.3	11.5
経済	10.5	12.8	8.5
教育	29.1	25.9	32.1
人文	27.4	18.2	35.5
芸術	4.8	2.9	6.5
その他	1.4	2.2	0.6
	100.0	100.0	100.0 (%)

調査内容：質問紙による携帯メールやインターネット利用の実態調査とそれらに対する意識調査、他者への関心や他者に対する行動の意識調査を行なった。質問紙は、フェイスシート、ネット接触頻度に関する質問項目および普段の考え方を問う下記の尺度項目により構成される。

- (a) インターネット意識 (12項目)：内閣府が2007年に実施した「第5回情報化社会と青少年に関する調査」の資料を参考に作成した。
- (b) 他者への関心 (13項目)：辻 (1993) の他者意識尺度のうち内的他者意識6項目、外的他者意識4項目、空想的他者意識3項目を用いた。
- (c) 日常生活の他者に対する行動様式 (5項目)

質問項目の配列はランダムに並び変えた。

集計と統計解析にはSPSS for Windows Ver.16を用い、ネット意識の因子分析、分散分析を行った。有意水準は5%とした。

3 結果

①余暇・睡眠・ネット利用状況

表2は余暇時間・睡眠時間・メール送信数・情報サービス利用時間・家族との会話時間について、性別、所属学部別の平均値と標準偏差を示したものである。平日・休日の余暇時間と休日の睡眠時間、家族との会話時間に有意な性差がみられた。余暇時間に差がみられたのは、余暇時間

の定義の曖昧さにより、男性でばらつきが多かったことが影響していると考えられる。家族との会話時間は明らかに女性の方が多く、妥当な結果であった。

所属学部別では同様に、平日・休日の余暇時間に有意な差がみられた。この結果は学部の特性を反映しているとも考えられるが、回答者の多くが1年生であったことから、専門教育の影響というより、余暇時間の捉え方による誤差と考えることが妥当と思われる。携帯メール送信数について、性差はみられなかったのに対し、顕著な学部差がみられた。しかし、理系学部・文系学部で一貫性はみられず、学部のどのような特性が影響しているのかは不明であった。パソコンメールはあまり用いず、携帯メールを多用する傾向は全学部にあてはまり、やはり1年生が多かったことによるとと思われる。家族との会話時間は、平均値に学部差がみられるが、標準偏差の値が高い、すなわち個人差が大きかったため、有意な差とはならなかった。

② ネット意識

普段の考えを問う30項目の質問項目のうち、インターネットや携帯メールについての意識について聞いた12項目について「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5段階を「ネット意識得点」として平均値と標準偏差をしめたのが表3である。なお、質問紙ではこれらの質問項目は連続させず、ばらばらに配置されている。有意差がみられたうち、「悩みを聞いてもらう人が身近にいる」得点が最も低かった薬学で「実生活で仲間が見つからない」得点が最も高い、ということ以外は、学部の特徴を反映しているとは考えにくい。

③ 他者に対する行動様式

日常生活における他者に対する行動について表4に示した。「電車内で知合いと話す時は声の大きさに注意する」「エレベータで扉を押さえてもらったら会釈する」「階段で後ろから急いでいる人が来る気配を感じたら脇によける」「傘をさしながら狭い道で人とすれ違う時、至近距離ですれ違う気まずさを軽減するために傘で身を隠す」「電車で人が来たら席をつめてスペースをあける」の5項目のうち「電車内…」を除く4項目に有意差がみられた。しかし、ここで注目すべきは、「傘」以外は、マナーとして社会的に容認される行動様式が明確である質問項目であり、肯定的な回答が多かったことである。実際の行動が回答通りであるかはともかく、本研究の対象者らは一般的な規範意識は高いことが窺える。一方「傘」の項目は、良否の判断が難しい項目であると思われるが、やや否定的な意見が多かった。

表2 性別・所属学部別にみた余暇時間・睡眠時間・メール送信数・情報サービス利用時間・家族との会話時間の平均

		全体	男性	女性		医	薬	工	看護	経	教	人文	芸	その他	
		n	739	334	405	13	21	102	83	197	213	56	45	9	
余暇時間(時間)	平日	3.5	3.9	3.2	***	6.2	3.8	4.1	3.3	3.7	3.4	3.4	2.7	4.8	***
		2.1	2.4	1.8		2.9	3.3	2.0	2.4	1.7	2.0	2.0	1.9	4.5	
余暇時間(時間)	休日	7.0	7.5	6.6	**	9.4	7.9	7.9	6.6	7.3	6.8	6.7	7.1	6.2	*
		3.5	3.8	3.3		2.1	3.4	4.0	2.6	3.3	3.4	3.4	4.2	5.7	
睡眠時間(時間)	平日	5.8	5.7	5.8	n. s.	5.9	5.5	5.7	5.8	5.8	5.8	5.7	5.7	6.2	n. s.
		1.1	1.2	1.1		1.3	1.4	1.0	1.1	1.1	1.2	1.1	1.2	1.9	
睡眠時間(時間)	休日	7.8	7.6	7.9	*	8.0	7.9	7.5	7.7	7.8	7.5	8.0	8.0	7.9	n. s.
		1.8	1.9	1.7		2.2	1.9	1.7	1.4	1.8	1.9	1.9	1.7	1.6	
メール送信数(通)	携帯電話	12.4	11.7	13.0	n. s.	8.1	12.8	8.5	16.1	12.6	8.4	10.1	13.8	12.4	***
		14.2	13.9	14.4		8.0	13.7	8.3	17.4	13.7	9.3	15.5	14.4	14.2	
メール送信数(通)	パソコン	.5	.6	.5	n. s.	.9	.2	.7	.6	.6	.2	.2	.7	.5	n. s.
		2.1	2.3	1.9		2.4	.6	2.3	2.8	2.1	.5	.5	1.7	2.1	
情報サービス利用時間(分)	平日	58.1	58.7	57.6	n. s.	37.9	44.2	59.9	54.4	58.2	62.5	59.5	46.1	55.6	n. s.
		52.5	55.2	50.1		23.1	31.0	52.2	50.0	45.9	58.6	55.3	41.1	35.7	
情報サービス利用時間(分)	休日	77.6	78.4	77.0	n. s.	42.5	64.2	76.4	67.8	78.8	80.9	83.2	65.5	71.3	n. s.
		79.2	84.8	74.4		34.1	51.2	81.6	48.5	71.3	90.4	83.0	66.9	44.2	
家族との会話時間(分)		65.4	55.4	73.5	**	57.5	100.9	54.9	63.8	71.5	73.1	61.5	59.2	54.5	n. s.
		57.4	51.3	60.8		63.1	91.3	63.1	44.8	69.0	59.1	48.1	49.7	43.9	

上段：平均値

*** p>.001 ** p>.01 * p>.05 n. s. 有意差なし

下段：標準偏差

表3 所属学部別にみたネット意識得点の平均値と標準偏差

	全体	医	薬	工	看護	経	教	人文	芸	その他	
n	739	13	21	102	83	197	213	56	45	9	
ネットや携帯でのみ連絡する友人	1.8 1.3	2.0 1.6	1.7 1.4	1.8 1.4	1.4 .8	1.9 1.4	1.9 1.3	1.7 1.2	1.8 1.3	1.3 1.0	n. s.
実生活で仲間が見つからない	1.8 1.0	1.9 1.4	2.3 1.0	1.7 .9	1.8 .9	2.2 1.2	1.7 .9	1.7 .9	1.9 1.1	2.0 .9	**
近くの友人ともメールでやりとり	2.7 1.3	2.9 1.3	2.6 1.2	2.2 1.3	2.3 1.2	2.6 1.2	2.9 1.3	2.6 1.3	2.7 1.3	2.9 1.3	**
ネットで知り合いたい	2.0 1.1	2.0 1.1	1.9 1.0	2.1 1.1	1.8 1.0	2.1 1.1	2.0 1.2	2.0 1.2	2.1 1.2	1.6 .9	n. s.
メールは結びつきを強くする	3.1 .9	3.1 1.4	2.5 .9	3.0 .9	3.0 1.0	3.0 .9	3.2 1.0	3.3 .9	3.2 1.0	3.1 1.2	*
悩みを聞いてもらう人が身近にいる	4.1 1.1	4.2 .8	3.7 1.1	3.9 1.1	4.0 1.0	3.8 1.2	4.3 1.0	4.3 .9	4.0 1.1	3.8 .8	***
嫌な事があるとネットに接続	1.9 1.1	2.2 1.1	1.9 .9	1.6 .9	1.7 1.1	2.3 1.2	2.0 1.2	2.0 1.2	2.1 1.2	1.3 .7	**
ネットを通じて発信したい	2.1 1.1	2.1 1.2	2.0 1.0	1.7 1.0	2.0 1.1	2.2 1.2	2.1 1.1	2.1 1.2	2.2 1.2	2.1 1.4	n. s.
メールやネットで夜更かし	3.0 1.5	2.9 1.3	2.2 1.4	2.8 1.5	2.8 1.3	3.0 1.4	3.0 1.5	3.2 1.5	3.0 1.5	3.1 1.5	n. s.
欠席・遅刻の連絡はメール	3.5 1.2	3.7 1.3	3.3 1.1	3.0 1.3	4.1 1.0	3.5 1.2	3.4 1.2	3.8 1.2	3.7 1.1	3.2 1.5	***
メールの返事が来ないと不安	2.9 1.2	2.3 .9	2.8 1.1	2.8 1.2	3.2 1.0	2.8 1.2	3.3 1.2	2.8 1.3	2.8 1.2	3.0 1.0	**
話すよりネットが楽しい	1.8 1.0	2.3 1.3	1.8 1.0	1.9 1.0	1.8 .9	2.1 1.0	1.8 1.0	1.7 .9	1.9 1.0	2.1 .9	n. s.

上段：平均値

下段：標準偏差

*** p>.001

** p>.01

* p>.05

n. s. 有意差なし

表4 所属学部別にみた日常生活における行動得点の平均値と標準偏差

	全体	医	薬	工	看護	経	教	人文	芸	その他	
n	739	13	21	102	83	197	213	56	45	9	
電車内では声の大きさに注意	3.7 1.0	3.2 1.4	4.0 .9	3.6 1.0	3.5 .9	3.7 1.1	3.6 1.0	3.8 1.0	3.7 1.1	3.8 1.4	n. s.
エレベータでドアを押さえてもらったら会釈	4.5 1.6	4.3 .9	4.4 1.0	4.0 1.1	4.4 .8	4.8 4.3	4.6 .7	4.6 .7	4.5 .7	4.7 .7	*
階段で後ろから気配を感じたら脇によける	4.1 1.0	3.4 1.0	4.0 1.1	3.7 1.2	4.0 .9	4.0 1.1	4.1 1.0	4.2 1.0	4.1 .8	4.6 .7	**
傘をさし人とすれ違う時傘で身を隠す	2.5 1.2	2.0 1.3	2.8 1.2	2.2 1.1	2.3 1.1	2.5 1.2	2.7 1.2	2.3 1.2	2.5 1.2	3.6 1.5	***
電車で人が来たら席をつめる	4.1 .9	4.1 1.1	4.1 .7	3.8 1.1	4.2 .8	4.1 .9	4.1 .9	4.2 .9	4.2 .8	3.9 .9	*

上段：平均値

*** $p > .001$ ** $p > .01$ * $p > .05$

n. s. 有意差なし

下段：標準偏差

④他者意識

表5・表6・表7は、他者意識尺度の学部別得点を示した。内的他者意識の3項目と、空想的他者意識の3項目に統計的には有意差がみられたが、学部別の特色を反映したものとは考えにくい。むしろ、全体の平均は3点近辺に収束し、標準偏差の値もそれほど高くないことから、「どちらともいえない」を選択する傾向にあるといえる。他者に対して全く無関心であったり、他者を強く意識している、という極端な例は少ないことが窺えた。

表5 所属学部別にみた内的他者意識得点の平均値と標準偏差

	全体	医	薬	工	看護	経	教	人文	芸	その他	
n	739	13	21	102	83	197	213	56	45	9	
他者の態度や表情に気をつける	4.0 .9	3.8 .8	3.9 .9	3.9 1.0	3.9 .8	3.9 .9	4.0 .9	4.0 .9	4.1 .8	4.0 .9	n. s.
他者の心の動きをいつも分析	3.2 1.1	3.6 1.2	3.6 1.1	3.2 1.1	2.8 1.0	3.2 1.1	3.3 1.0	3.2 1.1	3.5 1.1	2.6 .9	*
人の考えを絶えず読み取ろうとする	3.3 1.1	3.1 1.2	3.3 1.0	3.2 1.0	2.8 1.0	3.2 1.1	3.4 1.1	3.3 1.0	3.5 1.1	3.2 1.2	*
他者の表情の変化を見逃さない	3.3 1.0	3.3 1.1	3.3 1.1	3.2 1.1	2.8 .9	3.3 1.0	3.5 1.0	3.2 1.0	3.1 1.0	2.9 .9	*
人の気分の変化を敏感に感じる	3.5 1.0	3.3 .9	3.4 1.1	3.5 1.0	3.4 .9	3.5 .8	3.7 1.0	3.5 1.1	3.5 1.0	3.1 .6	n. s.
気持ちを理解するように心がける	3.9 .9	3.7 1.3	3.9 1.1	3.8 .9	3.7 1.0	3.7 .9	4.0 .9	3.9 .9	3.9 .9	3.3 1.2	n. s.

上段：平均値

* $p > .05$ n. s. 有意差なし

下段：標準偏差

表6 所属学部別にみた外的他者意識得点の平均値と標準偏差

	全体	医	薬	工	看護	経	教	人文	芸	その他	
n	739	13	21	102	83	197	213	56	45	9	
表面的な他者の印象にとらわれる	3.2 1.0	2.8 1.0	2.9 1.2	3.4 .9	3.1 .9	3.4 1.0	3.2 .9	3.2 1.1	3.3 1.0	3.7 .9	n. s.
人の外見に気をとられやすい	3.3 1.0	3.2 1.0	2.9 1.1	3.4 .9	3.3 1.0	3.5 1.0	3.2 1.0	3.4 1.1	3.4 1.0	3.8 1.1	n. s.
人の体型やスタイルに関心	3.4 1.1	3.2 .8	2.9 1.0	3.4 1.1	3.5 .9	3.6 1.1	3.4 1.1	3.5 1.2	3.5 1.1	2.6 1.0	n. s.
他者の服装や化粧が気になる	3.4 1.1	3.2 1.4	2.9 1.0	3.4 1.2	3.6 .8	3.5 1.0	3.3 1.0	3.4 1.1	3.4 .9	2.4 1.0	n. s.

上段：平均値

n. s. 有意差なし

下段：標準偏差

因子とした。第2因子は「友人や家族と話すよりもインターネットを利用している方が楽しい」など、実生活でのコミュニケーションよりネットを好むとして「ネット逃避」因子とした。第3因子は「すぐ近くにいた友人ともメールでやり取りする」「メールの返事がすぐに来ないと不安になる」など、「メール依存」因子とした。これらネット意識の下位尺度得点で、性差や所属学部による差はみられなかった。

⑥ ネット意識と行動

表9は行動得点をネット意識の各因子の高群と低群で比較するためt検定を行った結果を表にまとめたものである。匿名性因子は他者に対する行動との関連はみられず、メール依存因子は全ての行動に関連がみられた。またネット逃避因子も「電車で声の大きさに注意する」以外の行動に関連があった。匿名性因子は他者に対する行動に影響していないことから、逆に他者に対する無関心さを反映していると考えられる。

表9 ネット意識の下位尺度と行動の関係

	匿名性	ネット逃避	メール依存
電車内では声の大きさに注意	—	—	*
エレベータでドアを押さえてもらったら会釈	—	**	**
階段で後ろから気配を感じたら脇によける	—	*	*
傘をさし人とすれ違う時傘で身を隠す	—	**	**
電車で人が来たら席をつめる	—	*	*
** p>.01 * p>.05			

⑦ ネット意識と内的他者意識

表10は内的他者意識得点をネット意識の各因子の高群と低群で比較するためt検定を行った結果を表にまとめたものである。メール依存因子の高いと「他者の態度や表情に気をつける」「人の気持ちを理解するよう心がけている」「人の考えを絶えず読み取ろうとする」の得点も高く、内的他者意識との関連が示された。これらの結果から、メール依存型は他者への関心が高く、社会的に容認されやすい行動様式を取る傾向がみられた。

表10 ネット意識の下位尺度と内的他者意識の関係

	匿名性	ネット逃避	メール依存
他者の態度や表情に気をつける	—	—	***
他者の心の動きをいつも分析	*	—	***
人の考えを絶えず読み取ろうとする	*	—	***
他者の表情の変化を見逃さない	*	—	**
人の気分の変化を敏感に感じる	—	—	**
気持ちを理解するよう心がける	—	*	**

*** p>.001 ** p>.01 * p>.05

4 考察

対人コミュニケーションに関わる諸問題について、高橋は、インターネットや携帯メールを利用した非対面型コミュニケーション(CMC: Computer-Mediated Communication)においては、画面に表示された文章(テキスト)によって情報の送受信が行なわれ、そこには他者の様子を観察することで得られる非言語的の手がかりといえる「身体言語」に関わる情報は全く存在せず、CMCは対面型コミュニケーションと異なる心理的特性を有することが明らかにされつつあることが指摘されてきている。

今回行動様式で取り上げた「傘をさしながら狭い道で人とすれ違う時至近距離の気まずさを軽減するため相手側に傘を傾けて自分を隠す」という質問項目は、越川(2001)が「江戸しぐさ」として紹介している伝統的な日本人の立ち居振る舞いの動作の「傘かしげ」を参考とした。江戸しぐさとは、元々江戸時代の将軍家御用達商人たちが、商売をする上で支障をきたさないよう、人間関係を円滑にするためのノウハウとして培ってきた社会的スキルとされ、単に礼儀作法などではなく、相手を尊重する精神がその根幹にあるといわれる。本来の傘かしげは相手にしづくがかからないように外側すなわち相手とは反対側に傘を傾けるものである。今回の調査では2割が相手の方に傘を傾けるという結果となったが、これは、Goffman(1980)のいう「儀礼的無関心」を装うために、相手の視線を避けることを重視した上での行動であるといえる。人と人とのコミュニケーションにおいて、身振り、表情、視線などのノンバーバルな情報は、実際に対面してさまざまな文脈においてやりとりしてく中で、それを読解する能力が培われていくものであるが、対面しないで頻繁にやりとりする若年層においては、それ以前の世代とは異なった能力を有してい

るのかもしれない。

また、小此木(2000)はかつて、1対1の二者関係を2.0のかかわりと呼び、1対1の関係とは異なる次元の人間関係である三者関係を3.0のかかわりと呼んだ。三者関係を円滑に発展させるためには、二者関係とは型の違う適応能力が必要であり、より社会性の高い集団心理の原型でもあることから、社会的スキルの向上のために必須の人間関係であった。しかし、現代社会においては、1.0の人間と、テレビゲームに代表されるような0.5の対象との関係を指す「1.5のかかわり」が、現在のコミュニケーションのあり方に大きな影響を及ぼしていることも指摘している。1.5のかかわりが日常化するにつれ、伝統的な規範や道徳による3.0の世界の秩序が力を失い、2.0、すなわち1対1の人と人との関係ですらますます希薄になっているという。1.5のかかわりを持つことによって、人々は1.0の本当の孤独に直面しないで済むようになった半面、2.0やそれ以上の対人関係を持ちたいと思う、人に対するニーズをあまり抱かなくなった。1.5の関わりに留まるということは、より大きな集団にも適応可能な社会的スキルを構築する機会を得られないことにつながる。

冒頭にも述べたように、若年層ではすぐ近くの人とでも携帯メールでやり取りするような「対面しないコミュニケーション」が当たり前になり、本来2.0のかかわりであるはずの関係までも1.5のかかわりに変容させている。現代は、「ケータイ・インターネット」上で構築された人間関係が現実社会での適応に結びつくかどうか、十分な知見を得ていないまま、情報通信ツールだけが発達してきてしまったといえる。しかし、非言語的情報の処理能力、すなわち、微妙な非言語的手がかりを迅速に読み取り、社会にある文化規範や規制と照らし合わせて臨機応変に行動するようなコミュニケーション能力は、人と人が実際に対面してやりとりする中でしか培われないはずである。今後、対面しないコミュニケーションのみで事足りるようになったら、他者の様子や行動を読み取るという社会的スキル獲得の機会を完全に逸してしまうようになることを危惧する。

※本研究は平成20年度文部科学省科学研究補助費(萌芽研究：課題番号19650163)の補助を受けた。

参考文献

- [1] 小此木啓吾、『「ケータイ・ネット人間」の精神分析』、飛鳥新社、東京、2000年.
- [2] 辻平治郎、『自己意識と他者意識』、北大路書房、京都、1993年.
- [3] Bull P. 著、市河淳章、高橋超 編訳『姿勢としぐさの心理学』、北大路書房、京都、2001年.
- [4] 越川禮子、『商人道「江戸しぐさ」の知恵袋』、講談社+ α 新書、講談社、東京、2001年.
- [5] 大坊郁夫、『しぐさのコミュニケーション』、サイエンス社、東京 1998年.
- [6] Goffman E. 著、丸木恵祐、本名信行 訳、『集まりの構造』、誠信書房、東京、1980年.
- [7] 川上義郎 編著、『情報行動の社会心理学』、北大路書房、京都、2001年.
- [8] 酒井朗、子どものケータイ、ネットの利用状況、児童心理、No.885、pp20-28、金子書房、2008年.
- [9] NTTアド編、『ネット&ケータイ人類白書「多感階級」の誕生』、NTT 出版、京都、2000年